

17-4 授業解題

授業者：有田 有志 先生

単元名：世界にある、いじめ、差別に対して自分は何をする？

授業タイトル：世界にある、いじめ、差別に対して自分は何をする？

教科（領域）：道徳

1. 【グローバル人材育成の観点からみた】本授業の「強み」

本授業は、同校の帰国生学級の生徒たちの外国における経験、また授業者が過去に関わったクラスにおける外国からの転入生の経験などを素材に、差別やいじめについて考えるという授業である。いじめは日本の学校に広く分布するよく知られた教育問題であるが、これにさらに文化的差異や差別の視点を重ねるところに本授業の特色がある。

そして本授業の「強み」は、教材であるいじめや差別のストーリーを生徒たちにも身近な学校生活に取材している点にある。一般にグローバルな授業の開発は、そもそもグローバル化という事象そのものが非常に抽象的であるという原理的困難を抱えている。例えば、人種や民族にかかわる差別は、メディアや学校の授業で触れることはあっても、遠い世界で起こっていることと捉えられがちである。その点、本授業は、生徒たちにとっての身近な存在（同じ学校に通う帰国生）たちに起こった出来事を教材として、グローバル世界における問題としての価値葛藤を考えるものであり、ここに本授業の強みがあるといえる。

また同時に、価値葛藤の問題に対して「自分には何が出来るか」を思い切って考えさせるという本授業は、生徒たちが実際に提起した解決策の質に関わらず、問題解決へのコミットメントを促すという意味で、重要なものと言える。

2. 授業のさらなるグローバル化に向けて

本授業の学習活動は、それが身近なところで取材されているということもあり、一つひとつが生徒たちへの強い訴求力をもったものと評価できる。逆に言えば、全一時間で構成されている本授業は、そのような教材の効果を汲みつくすには、時間的にやや窮屈であった可能性も否定できないように思われる。前半の帰国生のスピーチについて考える学習と、後半にあった教室における転入生の経験について考える学習は、それぞれ独立させて深めることもできたかもしれない。

とくに前半部分については、社会科や人権学習とも連携することで、他教科における知的な学習と連動したものへと再編していくことも可能ではないだろうか。道徳科は一般に「心」が強調されるが、道徳科で言うところの「道徳性」とは、本来的には知的な能力も含む人間の総合的な資質・能力である。カリキュラム・マネジメントという視点も含めて、他教科の学習との連携を模索することが、本授業の一層の発展の手がかりとなるように思われる。